O3-2

外傷性植物状態患者の生命予後　千葉療護センターの退院患者についての考察

Prognosis of the traumatic persistent vegetative patients. Analysis of 58 cases discharged from Chiba Ryougo Center.

岡　信男、河野　守
自動車事故対策機構　千葉療護センター　脳神経外科

Nobuo Oka、Morimasa Kono
Department of Neurosurgery, Chiba Ryougo Center, Chiba, Japan

千葉療護センター(以下センター)は2003年度末までの20年間に105人の自動車事故を原因とする植物状態患者が入院して、58人が退院した。今回はこの58人の退院患者の、生命予後に注目し、センターにおける医療について考察する。【対象・方法】 調査期間中に退院した患者の58人の延べ144404人×日の診療録等について以下の検討をした。死亡例についは、同様な状態の患者の生命予後を文献的に調査し比較した。診療内容については、抗生剤の使用、手術、応援医師の依頼、転院につて調査した。【結果・考察】 調査期間中の死亡退院は11例で、これは年間死亡率に換算して約1.2%であった。これに対し、ほぼ同様の状態で病院に入院、または、在宅介護をしている群では、年間死亡率は15.2%であり、これは文献的に調査した値の十数%とほぼ一致していた。センターの死亡原因には呼吸器感染症が少ないが、比較した群では、死亡原因の半数以上が呼吸器感染症であった。呼吸器感染症による死亡が少ないことがセンターの死亡率が低い理由と考えられた。平均して、患者1名あたり、1年間に0.39回の経口抗生剤が、0.22回の静注抗生剤の投与が行われていた。実際には発熱した場合に、看護ケアにより抗生剤の投与に至らず解熱する例が遙かに多く、良好な生命予後の実現には看護ケアが大きく影響していると考えられた。応援医師の来院は、患者1名あたり一年間に0.3回、治療のための一時転院は全体で11回であった。死亡退院以外の47名の退院患者のうち24名が病院に、12名が施設に、9名が最終的に自宅に退院となった。このうち現在までに6名の死亡が確認されている。